

地球文明と生命価値経済システム

八巻節夫

※本稿は、2014年11月11日、日本青年館（東京・新宿区）で行われた講演内容をまとめたものです。

はじめに

きょうのテーマは、「地球文明と生命価値経済システム」です。えらく難しい名前を付けてしまいました。内容は至って単純で簡単であります。せっかく来ていただいたので、きょうは何らかの形でひとつでも皆様の心に残ればというお話をしたいと思います。よろしくお願いします（拍手）。

初めに、私は一応経済学専門ですから経済学の視点からお話することが多いですが、経済というと皆敬遠して、「経済」という名前を付けると誰も来なくなります。ただ、経済というのは決して難しいものではなくて、簡単に言うところのことです。

人間の欲望は限りがなくて、朝起きて夜寝るまで、ああしたい、こうしたい、あれが欲しい、これが欲しい。これらはきりがありません。このきりがありません。人間の欲望に対して、それを満たすものは商品とかサービス、そういうものです。裏付けとしてはお金です。それを満たす

地球文明と生命価値

【講師】八巻節夫氏



幸福な人生を送ることが経済の目的と語る八巻講師

手段である商品とかサービスを作るものは、生産資源とかエネルギーです。その生産資源・エネルギーは限られています。だから、片方で人間の欲望が無限にあり、片方ではそれを満たす手段に限りがあるので矛盾が生じます。その矛盾の解決、これが経済の本質です。

もっと言うと、限りある資源と生命価値との関係性です。後で紹介しますが、牧口常三郎創価学会初代会長が著した『価値論』では、「価値」というのは生命主体と客体、目的物である対象の花とかリンゴとか、そういったものとのどういう関係性にあるか、これが価値だと言います。その「価値」の概念を使って捉えれば、資源と生命価値との関係性の解明こそが経済の本質であると言えると思います。そういう視点からお聞きいただければと思います。

1 物の豊かさの限界

産業革命が始まったのは18世紀後半です。1776年というのは、アダム・スミスが「経済学」の体系を初めて樹立した『国富論』を著した年です。その17

76年あたりを起点として産業革命が始まったと言えます。それ以降、今日まで250年になんなんとしているわけです。その250年間、ずっと人類が様々な資源エネルギーを使って経済発展を遂げてきたわけです。

その経済発展を遂げるにあたって、どれだけエネルギー資源を使い、環境を破壊してきたか。この資源消費の状況は、世界全体でエネルギーの消費が1965年に対して2010年には既におよそ3倍に膨らんでいます。世界のCO₂の排出量は、1990年に対して2010年には1・4倍になっています。

CO₂削減の目標がありますが、1990年が一応基準年とされています。1990年をベースにして、「京都議定書」で唱えたように日本の場合には6%の削減をする。しかし、日本はそれから既に15〜16%増えているので、結局、20%強削減しなければ「京都議定書」の目標は達成できません。

日本はまだいいほうですが、これから発展するインドとか中国はどうかというと、中国はもうだいぶ発展

していますが、そういった国々がこれからかなりのエネルギーを消費して経済発展を遂げるでしょう。つまり、かなりCO₂を排出していくであろうと思われます。

経済発展・経済成長の表れをGDPと言って、日本国全体の経済の大きさをGDPで表しています。このGDPは大体500兆円ですが、バブルが崩壊してからは500兆円をほとんど上回らないまま、ずっと低迷しています。

そのGDPですが、経済がどんなに成長しても、人々の幸福度・生活の満足度は変わっていません。どうしてでしょうか？ 経済的には、物が豊富になってどんな成長しています。片方で、人々の幸せ・満足度が動かない。

日本の国民生活白書によると、人々が、「物の豊かさ」を求めるのと「心の豊かさ」を求めるのと、どちらか大きいかと言えば、昔は「物の豊かさ」を圧倒的に大きく求めていましたが、1970年代後半のあたりから「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を上回って逆転した。そして、その差はどんどん拡大する一方です。物が豊

かになっていけばいくほど、心の豊さが置き去りにされてきていると言えると思います。ですから、一体何のための経済発展なのか疑いたくなるような状況にあります。

2 地球環境とエントロピーの法則

いきなり少し難しい話になりますが、ここで「エントロピーの法則」についてご紹介します。この「エントロピーの法則」というのが、新しい地球文明を解く鍵の概念になります。「エントロピーの法則」は2つあって、第1法則と第2法則があります。

エントロピーの第1法則とは何か。これは「エネルギー保存の法則」で、要するに、宇宙全体の中のエネルギーの総量は一定であって変わらない。だから、片方でいくらか使ったとしても、エネルギーの絶対量は変わらないわけです。

第2法則が、エネルギーというのは使用可能なエネルギーから使用不可能なエネルギーに、ただ一方向に変わっていくだけであって逆に戻ることはないという

ものです。だから、使用不可能なエネルギーが使用可能なエネルギーになることはあり得ません。これが第2法則です。

「覆水盆に返らず」という諺がありますが、それと同じ話で、一度こぼれた水はもう飲めません。だから一度使ったエネルギーは二度と使えません。「不可逆性」という言葉で表しています。1リットルのガソリンには何キロカロリーかのエネルギーがありますが、そのエネルギーを使って自動車を30キロメートルぐらい走らせた。そうすると、1リットルのガソリンはなくなります。なくなるけれども、それは自動車がそちらに移動するためのエネルギーに変わったわけです。まあ、熱と排ガスのエネルギーに転換しただけです。つまり、使えるエネルギーから使えないエネルギーに転換しただけで量は変わりません。こういう話です。実は、これからの文明を考える上での鍵になる法則なので、これが大事だということです。

この「エントロピーの法則」を大体理解していただいたという事でいくと、第2法則によって、エネ

ギーを使える状態から使えない状態にどんどんしていけば、使えないエネルギーが累積します。その使えない度合いを「エントロピー」と言っています。要するに、汚れというか、地球の環境の汚染そのもののことを言っています。だから、どんどんエントロピーは増大する一方です。エントロピー増大の法則、第2法則によって、経済発展してエネルギーを使えば使うほどエントロピーはどんどん増大します。

私は相模原に住んでいます、あそこは自然がいっぱい結構いいところです。相模川があつて、湖が2つもあつて非常に緑が多い。そういう中で、人々が生活のために使ったエネルギーは使えないものになってエントロピーが増大していきます。その累積したエントロピーはその後どうなるかというと、基本的には土と水に吸収されて分解されていく。だから、相模川とかで吸収・分解されていきます。その相模原市を経て平塚・茅ヶ崎のほうに行き、それから相模湾に注ぐ。

地球の外で言うと、地球全体は開放系と言いますが、要するに、エントロピーが宇宙に吸収されて放出され

るわけです。だから、いくらエントロピーが溜まったとしても、吸収されて放出されるのだから問題ないではないかと思うかもしれません。しかし、吸収される、分解される働きには限度があります。川が汚れ過ぎたら全然浄化しません。下水をどんどん排出して垂れ流せば浄化できない。吸収・分解しない。

そういう状態を「ヒートデス」と言います。エントロピーが増大して累積していくとヒートデスに達する。これが、地球の死を意味します。そこまではいかないだろうと予測されますが、その危機は迫っているという学者たちもいます。このヒートデスに行ってしまうわけです。

3 GDPを豊かさの指標にする愚かさ

そもそも、何のために経済を発展させるのか。現在政権を担っている安倍晋三内閣が推し進めているアベノミクスも経済成長を目指しているわけですが、なぜ経済成長しなければならないのか。もちろん、雇用の問題とかがあるからです。物的には豊かになります、

物的な豊かさを人々はだんだん重要視しなくなっている。それよりも、心の豊かさを求めるようになってきました。

そうすると、物的豊かさを象徴的に表しているGDPという指標は、もう歴史的使命を終えたのではない。もう、そういう崇め讃えるような数値ではないのではないかと思えるわけです。大体、経済というのはい体何を目的にやるのか。経済的な豊かさを求めて、たくさんの所得を稼ぎ、物が豊富になる。これが人生の目的であり、幸福への道であり、それができる人が人生の成功者だとイコールで結びつけるわけです。これが間違いますが、この話をしていると時間がなくなりますから、これは人間の大きいなる錯覚だということのでこのへんでやめます。

いずれにしても、資源の浪費がかなり行われています。GDPの中身というのは、もちろん物を生産して生命にプラスになる商品が大半ですが、例えば交通事故が起こればGDPは増え、戦争が起きてもGDPが増えます。GDPの中身は、例えば領収書のない世界、

つまり、危険ドラッグとか売春とか、そういうのもGDPを押し上げます。だから、GDPの中身は価値のない無駄なものが半分を占めると言われています。いま言ったのは地下経済と呼ばれる世界で、日本の場合、推計ですが全体のおよそ12%弱と言われています。イタリアはもっと多くて25%を超えていると言われています。いずれにしても、それは人間の幸福につながっていません。交通事故が起きればGDPが増え、危険ドラッグが増えればGDPが増える、という中身ですから、半分ぐらいは浪費でしょう。

浪費の具体例として贈答品に使われるせんべいを見てみましょう。一番外側が上質の紙で包まれていて、まずこの紙自体がもったいない。その紙を開くと今度はスチールの缶の箱があつて、そこがまたビニールでぐるっと覆われている。それを開くとようやくせんべいらしきものが見えてくるが、それも上等な和紙でくるまれている。さらにご丁寧にプラスチックのトレイみたいなものに載せてある。あきれるというか、しみには腹立たしくなってきました(笑)。なぜこんなに無

駄遣いしているのか。

資源の浪費の象徴としてアメリカを例に挙げますと、この国の人口は世界の5%に過ぎませんが、資源は30%以上使っています。

アメリカで生産されるマフィンの例を見てみますと、まずマフィンの材料である小麦が膨大なエネルギーを使って生産される。その小麦を、ガソリンを使ってトラックで工場に運んで行く。工場で精製し、強化し、漂白し、あるいは栄養価を高めるために、ニコチン酸とか鉄分、チアミン、リボフラビンなどを投入する。さらに防腐剤や生地調整剤などを添加して焼き上げる。それをビニールで包装し、薄手のケースに詰め込んで、さらにビニール袋に包んで販売店へトラックで輸送する。これを、自家用車で乗りつけたお客さんが買う。そして食べる時には、そのケースとビニール袋が廃棄され、廃棄されたものはゴミとして収集され、焼却処分される。これはいくらなんでも大げさだと思えます（笑）。

たった130キロカロリーのマフィンを、これほど

のエネルギーを費やして作っているわけです。これを毎日、アメリカだけではなくて世界のあらゆるところで、あらゆる商品についてやっているわけです。このあきれるばかりの資源の浪費を何とかしなければならぬと思います。

いずれにしても、GDPイコール人間の幸福、イコール豊かさの象徴という考え方は捨て去られるべきであると思います。豊かになればなるほど環境が破壊されていくし、犯罪が凶悪化していくし、生きている充実感が失われていきます。そして、ストレスとか、うつとか、孤独感が増していきます。これが人類の進歩の姿だとしたらば、一体何のための文明かと思います。

4 現代の物質文明の問題点

話は変わりますが、『無痛文明論』という森岡正博さんという人が書いた本があります。この本の中で、「無痛文明」とはどんな文明なのかを鋭くえぐり出しています。一部だけご紹介しますと、「無痛文明とは『身体の欲望』が『生命のよろこび』を奪い取っていくとい

う仕組みが、社会システムのなかに整然と組み込まれ、社会の隅々にまで張りめぐらされた文明である」。生命の欲びをどんどん奪い取っていく、そういう仕組みが社会生活の中に張り巡らされているということです。

「快と刺激と快適さを生み出す様々な社会装置が網の目のように整備され、それらに取り囲まれることによって、われわれは『生命のよろこび』をどこまでも果てしなく見失っていく」。この世の中は隅々まで快適さを求め、快適さで溢れている。そういう中にどっぷり浸かっていると、どんどん生きる欲び、生命力を失っていく、こういう話がかかれていきます。自分が家畜化される、家畜と同じだということを「自己家畜化」という言葉で話しています。

「われわれの文明のなかで進行しているもつとも根源的な問題」は、人間の身体の欲望が人間自身から生命の欲びを奪っていることである。『欲望』が『よろこび』を奪い取るということ。これが文明の深層構造である。いまの社会を覆っている諸問題は、この次元の深さから把握し直さなければならない」。文明の根源問題は、

物質文明の中で、快適さを求めすぎ、その中に浸かりきっていることである。

いまの子どもたちは、冷暖房の効いた個室でゲームなんかをやっているでしょう（笑）。ああいうふうになににどっぷり浸かっていると、本当に季節感を失うし、外に出て行くのが億劫になるし、人と会うのも億劫になり、だんだん命の力が奪われていきます。『無痛文明論』は、いまの文明は、社会全体がそうなっていると言っています。この「無痛文明」は、イコール集中治療室みたいな社会だよ、どんどん生命力を失っていくのだよ、これが物質文明の結末の状況ですよと言っております。

ドイツの環境学者であるヴァイツゼッカーという人が『ファクター5』という本を著しています。一定単位のエネルギーがどれだけ生産物を生産するかを資源生産性と言いますが、技術革新によってあらゆる可能性を使っていけば、5倍ぐらいエネルギーを節約できる。つまり、5分の1のエネルギーで現在の経済を維持できる、こういうことを50の実例を使って紹介した

本です。

私は、ヴァイツェッカーという人に1998年にドイツで2時間ほどインタビューしたことがあります。社民党（SPD）の国会議員も務めた人で、ヴァイツェッカーが中心になって、ドイツで大々的に環境税の導入をリードしました。その人が『ファクター5』の中で「エコロジカル・フットプリント」という概念を紹介しています。

エコロジカル・フットプリントとは何かというと、経済を発展させるために人類がどれだけ地球を踏みつけているかを表したものです。フットプリントというのは「踏みつけた跡」という意味です。どれだけ踏みつけているかを、土地の面積で表して、これだけ地球を傷めつけているよ。要するに、地球の耐えられる許容限度を表していると言ってもいいですが、それがヴァイツェッカーによれば、人間生活維持のために、既に地球の限界を3割も超えているということです。

もし、発展中の途上国がアメリカ並みの生活水準を維持しようとするば、この地球が5・3個必要だと言

います。もし、日本人と同じ生活レベルを全世界の人類がやろうとすれば地球が2・2個必要だそうです。現在でも3割を超えているので、既に厳しい状況にあるということです。それでもなお、人々はこれを全然知らないかのように資源の浪費を行っています。

これは、まさに『法華経』に説かれる七譬のひとつ「三車火宅」に譬えられる。欲望の炎に包まれて自己破滅を迎えるというのに、それに気づかない。あるいは気づいていても、何とかなるだろうという思い上がりなのか、貪欲に身を任せて遊びほうけている。欲望を肥大化させている現代人の姿は、まさにこの火宅の炎に包まれる子どもにたとえられると言えます。

ジョン・ラスキンという社会思想家が、経済の目的とは何かということについて語っています。つまり、「愛する力、飲ぶ力、讃える力、それらをすべて含めての生活なのである。生活というのはそういうものだ。」「高貴で幸福な人々をたくさん養う国こそ最も豊かな国といえる」と言っている。これが本当の豊かさなんだ。単にGDPが量的に拡大すれば、それがイコール豊か

さだと追い求めていくのとは全然違う。幸福な人生を送るために経済の目的があるのだ。生き生きとした生命力で生きていくために経済を営んでいく。経済の究極の目的はそこにあるのだということです。

5 市場経済の問題点

時間が残り少なくなるので次のテーマに移りますが、いままでは現代の物質文明のいろいろな問題点をご紹介いたしました。「無痛文明」と呼ばれる現代物質文明からいかに脱却できるか。我々もそうで、一度快適さに慣れるとなかなかそこから抜けられません。例えば冷暖房にしても、真夏の暑い日に冷房するなど言われたら耐えられないでしょう。一度慣れるとそれ以前の状態に戻るのは大変なことです。どういうふうに転換できるのかということこれからお話ししたいと思います。

ここから本題に入りますが、いままでのGDPの拡大イコール幸福だという市場経済の問題点、欠陥は、大きく言うと3つあります。

ひとつは、人間の欲望を非常に短絡的に量的な関係でしか見ていない。人間の欲望について考えると、消費をするというのは、もちろんその商品の実用性や価値を評価して買うわけですが、買うときはそれだけではない。店員のもてなしがどうか、商品を作っている会社は環境にやさしいかどうかとも判断材料になります。とんでもない農薬を出しっぱなしの企業が作った製品だと買いたくなくなります。それから、健康によいかどうか、あるいはこれを身につけると社会的にどう評価されるかも考えます。場合によっては衝動的に買うこともあるでしょう。

とにかく、GDPの拡大は人間の幸福とイコールであるという捉え方、これが高いエントロピーを招く元凶であると言えます。人間の欲望と満足度の関係を図1で見てください。横軸は消費の拡大です。右に行けば行くほど消費が拡大していく。消費が拡大すれば満足度が増えます。しかし、その満足度の増え方は、ある程度行くと急には増えないで緩やかになります。縦軸は欲求度で、何々が欲しい、何々したいという欲求

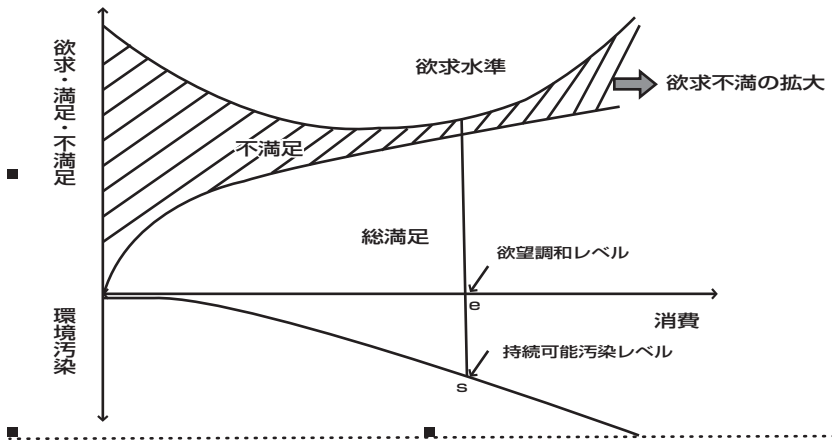


図1 欲求と満足のイメージ図

の程度です。

最初の消費、例えば全然お金がないときに1万円が手に入り、それを消費するときの満足度は高い。でも、不満足というか、欲求度が非常に高いと大きな不満足が残るわけです。お腹が空いたときの最初の1杯目のご飯は非常に美味しくて満足度は高い。だけど、2杯、3杯になってくると「もう、いいよ」となって、5杯、6杯になってくると、もう気分が悪くなってくるので低下していきます。

でも、いつ봐うで、ご飯を食べて空腹が満たされると、今度はコーヒーが飲みたくなって、デザートも食べたくなる。それが満たされると、今度は映画が観たくなって、それが満たされるとパチンコがやりたくなる。だんだん、欲求を満たす対象の欲求度が落ちてきます。欲求の程度が落ちていく一方で、満足の増え方が減っています。ここまでは、従来の経済学が教えているところですが、ここから先は私が独自に考え出しました。人によって違うと思いますが、人間にはある消費の

調和点、消費に調和する水準があるのではないかと考えています。それ以上消費を増やすと、むしろ欲望の炎に包まれて欲求度が急に高まっていくのではないかと。つまり少しの不足にも耐えられなくなると、不足に対する耐性が弱くなってくる。

私は温泉が好きで、贈答品で温泉の入浴剤をいただくことがあり、それを入れて入浴して満足しています。それがなくなると「何だ、もうないのか！」と言って不満を感じるようになります（笑）。ひとつの例ですが、このように急に耐えられなくなると、少しの不足にも我慢できなくなってくる。ですから、消費を増やせば増やすほど、むしろ不満が増えてくる。人間は生活するだけお金が入ればいいわけです。それ以上入るとろくなことがない（笑）。本当に生活できる範囲の収入があるというのが最もいいように思います。

このように、GDPの拡大、経済成長イコール人間の幸福という考え方、これは信仰に等しいような経済界の短絡的な考え方ですが、そういった時代はもう終わりを告げているように思われます。この人間欲望の

短絡的な捉え方が、まず市場経済の第1の欠陥です。

第2の欠陥は、市場経済は人間生活に非常に大切な要素、領域を度外視しています。なぜかというと、市場経済というのは、貨幣価値で換算できるものだけをGDPとして吸い上げます。貨幣価値のないものは無視・軽視・度外視します。例えば、その一番は自然や生態系です。自然や生態系は、もちろん市場価値に換算できるものもあります。森林の樹木とか、野菜を作る土壌とかは市場価値がありますが、普通の自然というのは市場価値をもちません。市場価値をもたなければ無視されます。これが最も危険な問題をはらんでいます。

それから、エントロピーの法則から言うと、生態系を考慮に入れることで、人間が生きるということの本当の意味が見えてきます。人間はどのように生きているかというと、食物を摂取し、消化して排泄する。いろいろな商品を買って廃棄する。この排泄・廃棄、これはエントロピーを高め、増大させます。

増大する一方のエントロピーを垂れ流しているのが

人間なのに、なぜ生きていけるのかというと、低いエントロピー、まだ使えるエントロピー、つまり、食べ物は低いエントロピーだから、低いエントロピーを摂取して、それで高いエントロピーを排泄・廃棄して相殺しています。だから生きています。人間は生きていくというだけで環境を汚染しているわけです（笑）。これはエントロピーからすれば偽らざる事実です。ですから、生態系を考慮に入れると、物質代謝が見えてきます。生態系を無視していること、これが、市場経済の第2の欠陥です。

市場経済の第3の欠陥は、人間生活に不可欠なインフォーマル経済を度外視していることです。インフォーマル経済というのは、主婦の家事とか、ボランティアとか、地域のいろいろな活動などを指します。これらは全然市場価値をもちません。主婦がいくら家事で頑張ってもお金をもらえない。こういうものはGDPの計算には全然入ってきません。こういうものをどんどん侵蝕していったのが、経済成長のプロセスなのです。経済成長というのはGDPの拡大です。GDPを拡

大するには、家事なんかをやっている場合ではなくて、外で働いて金を儲ける。そうすると家事がおろそかになる。しょうがないからセブンイレブンでおかずを買って来ます。コンビニエンスストアの商品は市場価値があるからGDPを増やす。だけど、家の中で作った料理は全然GDPを増やさないわけで、これが軽視されました。そのことで、人間の生活にとって不可欠な要素が失われてきました。これは非常に重大な欠陥です。これを取り戻して復権しなければ、本当の豊かさとは得られません。

このインフォーマル経済ですが、もしも主婦の家事とかボランティア、地域のいろいろな活動とかを貨幣価値で計ったならば、むしろGDPをはるかに上回るというある学者による推計があります。だから、インフォーマル経済が人間生活のコア、中心部分だということが言えます。実は、市場経済は全体から見たら、ほんの一部分に過ぎない。この市場経済が、それよりはるかに重要なインフォーマル経済とか自然環境をどんどん侵蝕していく。「GDPイコール人間の幸福」と

いうような変な信仰が蔓延しているためにこれが肥大化し、人間生活にとって重要な部分がどんどん侵蝕されていつているということを申し上げておきたいと思っています。

6 市場価値から生命価値へ

もう亡くなりましたが、創価大学に小熊信行先生という方がおられました。この小熊先生が、『生命再生の理論』という本を著されました。私は、この本を読んで衝撃を受けました。「生命再生の理論」とは何なのかというと、マルクスが「労働再生の理論」を打ち立てたのに対して、小熊先生は「いや、労働と狭めてはだめだ」といって、生命再生だと捉えました。

経済学では家庭というのは単なる消費主体、企業は単なる生産主体とみなされますが、小熊先生は「そうではない。家計は消費主体であると同時に生命の再生産主体である。家計は生命を育む。生命そのものを生み出し、生命そのものを維持し、生命エネルギーを生産する。それに対して、企業は確かに製品を生産す

る。製品を生産する主体であるけれども、同時に労働という形で人々の生命エネルギーを消費している」と、こういうふうに捉えたわけです。

私はそれをさらに敷衍して、エントロピーを絡ませて「いや、待てよ。生命再生産ではなくて生命価値再生産ではないか」と、こういうふうに妄想を巡らしています。でも、これは我ながらあつぱれというか、妄想でも今後発展していけばいいんです。

何が違うかと言うと、家庭は確かに生物としての生命を再生産している。いっぽうで、その家庭が家族のために料理を作ったり、団らんがあったりして、その中で生命エネルギーというか生命力を再生産しています。その生命力をもっと拡大していけば、それは生きること、つまり、生きることによって生まれる価値を再生産しているだろうと捉えたわけです。

そうすると、どうなるか。まず生命価値とは何かですが、生物的生命も含めて生命エネルギーとか、生命の欲びとか、そういったものを含んだ価値の総称で、これを生命価値と呼びます。具体的に言うと、ヴィク

ツール・フランクという人が書いた『夜と霧』という本があります。彼はアウシュビッツなどの強制収容所に収容されますが、生き抜いて、その体験を著したのがこの本です。文字どおり強制収容所には何もない。何も無いところですが、人間が生きているというだけで生まれる価値が3つあると書いています。

ひとつ目は、創造的価値。物をつくった喜び、大根ができたとか、絵が完成したとか、そこから生まれる価値、これが創造的価値です。

2つ目は、体験的価値。体験的価値というのは皆さんがきょうこの日本青年館にいらっしゃったというのも体験です。いくら家に帰って「変な先生がこんな変な話をしていたよ」と言っても、家族には臨場感がないし、伝わらない。ここにいるからこそ体験できることに価値がある。夕日を見て「美しいな」と感動する価値とか、素晴らしい小説を読んで涙するとか、そういったものから生まれる価値です。ある人と対話をしてすごい喜びが得られた。これも価値ですね。

3つ目に、この価値は最も大切だと思いますが、態

度的価値です。例えば、ここにカツカレーが2つあって一皿が650円。栄養は同じで、Aさんという奥さんとBさんという奥さんがこれを同時に食べるとします。極端な話ですが、Aさんは最愛の息子を交通事故で亡くした。Bさんは最愛の息子が東京大学に合格して嬉しくてたまらない。この2人が同時に食べると、Bさんは美味しくて栄養になって、120%ぐらい吸収します。大きなプラスの価値になっています。Aさんは喉にも通らないし、無理して食べると下痢するだけでマイナスの価値です。でも、カツカレーは同じ味、同じ栄養です。

どこが違うかと言えば、受け止める命の違いです。別にカツカレーばかりではありません。人生万般についていろいろなことがあります。例えば自分が持っているものとか、自分が住んでいる家とか、環境とか、職場とか、地域とか、対人関係とか、日々起こる出来事とか、そういうあらゆるものをこちらがどう受け止めるか。この受け止め方によって生まれる価値、これを態度価値と言っています。

私はそれにプラスして、他者との絆を結ぶことで得られる価値、利他的行動価値もあるだろうと思っています。他者の助けになることで自分の欲びというか、自他ともに益する。

いずれにしても、態度的価値が一番の要です。他の創造的価値と体験的価値、利他的行動価値、この3つの価値は、すべて、それがプラスの価値になるには、やはり態度的価値が勝負です。どう受け止めて、どう行動するか。ですからこの態度的価値が重要であると考えています。そういった価値をすべて含めて、生命価値と総称しています。

その生命価値を再生産するというシステムが経済システムとしてできれば、欲望の調和点で満足してそれ以上過剰な消費をしない。「足るを知る」ということです。過剰な消費に向かつていけば、むしろ生命の価値は減耗するでしょう。生命再生産をしていろいろな価値を生み出していけば、生命価値再生産に通じる。

企業も、持続可能な形の生産で止めれば生命価値再生産につながりますが、利潤の最大化を求めて、拡大、

拡大で大量生産するだけの利益追求型であれば、結局は地球のエントロピーを累増させるだけです。ある調和点で足るを知ることが非常に大事だということとです。

「コンドラチェフサイクル」という図(図2)があつて、ヨーロッパの産業革命以来のイノベーションの波をあらわしたものです。その中の第1の波は産業革命の始まりのときで、最初の繊維産業とか、機械化が始まりました。第2の波は鉄道が走り出して、それで蒸気機関車ができた。製鉄も行われました。第3の波は電気ができ、内燃機関ができました。第4の波は、石油化学の時代。そして、航空、宇宙です。現代はコンピュータであり、ネットワークであり、バイオテクノロジーであり、情報産業の時代です。これが、第5の波。これからの波は、図2に示す通り、第6の波として、ヴァイツェッカーの言うように資源生産性を拡大する時代です。資源生産性を5倍以上にする。これがリード役を果たす。システムを変えることでいろいろな口スを節約できる「システムデザイン」、動物がもつてい

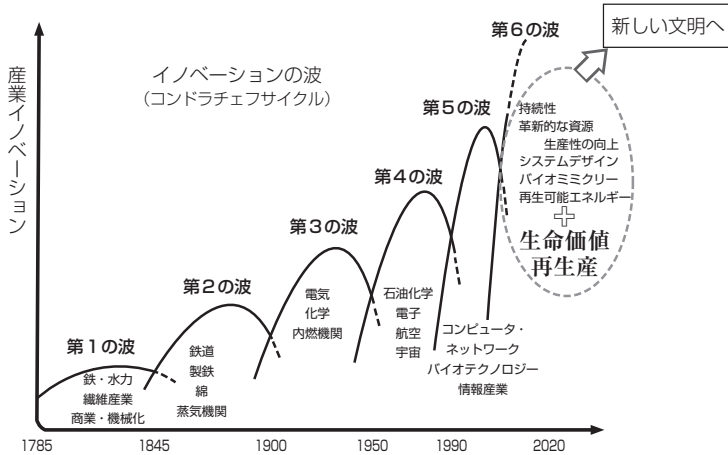


図2 5つの技術革新のサイクルと将来のサイクルの仮説

出典：エルンスト・ウルリッヒ・フォン・ワイツゼッカー他『ファクター5 エネルギー効率の5倍向上をめざすイノベーションと経済の方策』（明石書店、2014）28頁より転載・加筆

る技能を人間の技術の中に取り込もうという「バイオミミクリー」などの発展が期待されます。そして、化石燃料から再生可能エネルギーに転換する、これらが第6の波を形成していくことになるでしょう。さらに、先ほど言った生命価値再生産という時代精神がこれをリードしていけば、新しい文明につながっていくだろうと思われます。

それで、いままで説明していたことが頭にあれば、図3は理解できると思います。図は仏法的生き方と生命価値創出ということについて説明したものです。例えば、「煩惱即菩提」とか、「生死即涅槃」とか、「色心不二」とか、「足るを知る」とか、それらも含めて、そういう生き方が態度的価値を作動させる。ものごとの受け止め方を積極的な姿勢に変えていく。積極的な心の姿勢に変わること、態度的価値が高まっていく。人生はいろいろな環境や出来事に遭遇し、対人関係や社会関係に取り囲まれますが、それが態度的価値で照らされて、そこから生命価値が生まれて、これが幸福な人生につながっていく、こういう図式です。

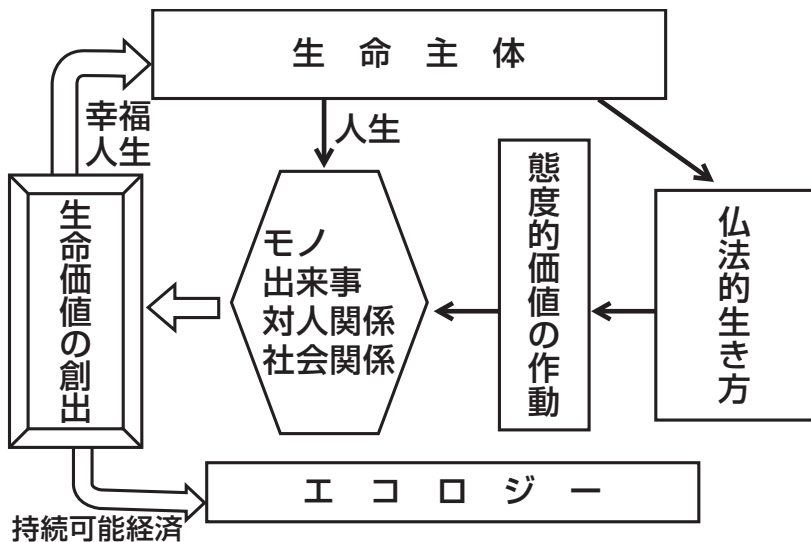


図3 仏法的生き方と生命価値の創出

最後になりますが、態度的価値が最も大事だということは理解していただけたと思います。経済学では「幸福」というのは考察の対象から外されてきました。幸福というのは人によって考え方、感じ方が違う。幸福とは何か。私は、コロンビア大学のラオ教授（スリックマー・S・ラオ）という人が書いた『幸福論』という本を読んで、とても感動しました。

ラオ教授が言うには、幸福というのは条件ではない。こうなったら幸福だ、あんなったら幸福だ、あと5キログラム痩せてくびれができたら幸福だ、旦那の給料が10倍に増えたら幸福だとか、そういうものではない。

幸福というのは、本来、人間の命の中に具わっているものだ、命の中にあるものだということです。これは、どこかで聞かれたことがあるでしょう。仏法の十界論にいう素晴らしい「仏界」の力強い命が具わっているという法理に通じます。

さっきの『無痛文明論』を書いた森岡先生は、では無痛文明を克服するにはどうしたらいいかを示唆的に書いています。生命の歓びを失っている、快適さにと

つまり浸かっている、では、その生命の欲びを復活させるにはどうすればいいか。「苦難に直面したとき、自己の変容をはからずに、外部状況だけを変えようとしたならば、このような生命のよろこびはおとずれない」。ここは、とても大事な点です。

「生命のよろこびがおとずれるのは、苦しみや、つらいことに直面したときに、そこから逃げようとせず、自分自身のほうを解体し、変容させ、再生させたときに限る」というのです。生命の欲びというのは、快適さにどっぷり浸かって何も変わらなければ得られない。アル中の人がお酒を飲んで、止めようと思わないかもしれないけれども、そのまま飲んでいても何も変わらない。苦難を乗り越えてこそ「ああ、本当に自分はお酒を飲まないでいられたな。素晴らしいな」という欲びが突然襲ってくる。これが命の欲びです。快適さにどっぷり浸かっているとそこから抜け出すには、困難に直面し、それを乗り越えることなんだと言っています。

幸福というのはこれまで経済学の対象ではなかった。

最近では、客観的に幸福は計れるという。各国が「幸福度指標」というのを開発して、それを数値化しています。ニュー・エコノミクス財団というのがあって「地球幸福度」を開発して発表しました。そしたら、何と世界で1番目がコスタリカです。2番目がベトナム、3番目がコロンビア、日本は45番目。アメリカに至っては105番目で、とにかく先進国は幸福度が低いです。毎年順位が大幅に変わるので信用できない部分があります。さすが、いずれにしてもこれがだんだん正確になっていけば、この幸福度を発表して社会に浸透させていき、これを客観的に社会が評価していくようにすれば、GDPが増えたからどうだということよりも、「幸福度が増えた」ことが重視されるようになり、そのほうがどれだけいいかと思います。

7 物質文明からの転換への要件

結論として、私は物質文明から地球文明の転換には、6つの要件が必要だろうと思います。ひとつ目は、言うまでもなくエネルギーの転換です。化石燃料から再

生可能エネルギーに重心を移していく。

2 番目は、ヴァイツゼッカーが言うように、資源生産性を高めていく。このために、あらゆる努力の連帯を図っていくことだと思われる。

3 番目がシューマッハという経済学者の言う「スモール イズ ビューティフル」です。つまり、地域で生産地消、エネルギーも含めて、人、物、金、すべて生産地消でまかなうという方向性、地域力の結集です。外資系の大型店が地域にドカンとできて地域の金を全部持っていくということは、あまり歓迎できない。昔あった駄菓子屋とか、ああいう感じで人と人とが触れ合うような生き生きとした、インフォーマル分野を大事にする経済、これが復活するようなことが必要です。

そういうときに、地域力の結集で欠かせないのはやはり女性の力です。女性は非常に粘り強いですから、地域力結集というときには女性の力が本当に活かされます。女性の力を地域力の結集の要としていくということが大事です。

4 番目は「補完性原理」と言いますが、もともとこれはキリスト教の社会法典に載っている原理です。EUも補完性原理で動いています。要するに、自分できめることは自分の力でやるということです。自分できない部分については、ボランティア部門・隣人・コミュニティ、共助・互助、それでもお手上げだというときに、初めて地方政府に頼る。それでダメなときには中央政府に頼る。

「補完性原理」の本来の趣旨は、自助である個人・家族、ここに中央政府とか地方政府の権力が入り込んではならない、というのがそもそも趣旨です。ところが、それがだんだん逆転して、政府の都合のいいように解釈されて、政府がそんなのは出来ないというときの理由として使っています。それは自助でやってくれという。

いずれにしても、これから大事なものはボランティア部分です。インフォーマルの部分と地方政府が連携して、地方政府はある程度補助金を出してそれを支援する。青空市場とか、そういう人が触れ合える場所を

手助けして、地域力の結集を図っていく。ここで連携が必要だろうということで、やはり女性の力が必要です。

それから、5番目は、幸福度指標をGDPよりも有意な指標として定着させていく必要があるでしょう。

6番目は、地球全体のエネルギーの公正な配分をどうシステム化するかです。これが大事です。エネルギー、あるいは地球環境、生態系そのものは人類共有の財産だから、こうした人類共有の財産を金に物を言わせて独占して、高く売りつけるというようなことは決してやってはならないと思います。

しかし最後に、一番大事なのは、やはり生き方の変革であろうと思われます。この生き方の変革、つまり、これからの文明は単に化石燃料を再生可能なエネルギーに変えるというだけで済むものではありません。社会全体が根底的に変革していかなければ文明の転換はできません。

我々自身が本当に快適さの追求をかける生活から脱出できるかどうか、これも大きな変革です。根底的

な変革、つまり我々自身の生き方の変革が必要です。快適さにどっぷり浸かっていると、本当にそこから脱出することはできません。

私の家で、だいぶ前ですが、子どもが小さいときにノーエネルギーデー、ノーマネーデーという日を設けていました。この日は実際に買い物をしてない、テレビは見ない、料理するにも薪でやる、というような日を週に1回やるわけです。これはできめんでした。20%エネルギーを削減できました。そして、子どもたちもキャンプをやっているようで喜んでいました。ローソクの光で夕飯を食べたりするので楽しみなわけです（笑）。こういうことをやれば、楽しみながら20%のエネルギー削減ができるわけです。皆さんもよろしければひとつ頑張ってください（笑）。

むすび

いずれにしても、生きる喜びを感じられる生き方が大事です。そのために生命価値、これをどう創出していくか。この社会がそれをどうやって仕組みとして作

っていか、そこで鍵になるのは牧口創価学会初代会長のおっしゃる人道的競争です。

池田大作創価学会名誉会長もおっしゃっていますが、軍事的競争、政治的競争、経済的競争、その次が人道的競争というような並列ではなくて、人道的競争というのは、あらゆる競争の中で一番浸透していかなければならない原理で、あらゆる競争に基底として流れていかなければならない原理です。

経済的競争も、弱肉強食ばかりで人を犠牲にして自分だけがいい思いをすればいいということではなくて、経済的競争の中に人道的競争が根底にあって、それで自他どもの幸福を願うような経済的競争、これをこれからの時代精神としていくことが大事です。これからの文明を築く基軸として、鍵を握るものであらうと思います。

生命尊厳思想に基づく生命価値の増進、これがこれからをリードする基軸になるでしょう。それを実現させる前提は、何と言っても人道的競争の社会的浸透でしょう。人道的競争が社会的に浸透していけば、そう

いった生命価値の増進が図られる社会、文明がやってくるだろうと思います。

(やまき せつお／東洋大学名誉教授)